表紙の解題

古人糟魄

或時、齊の桓公が堂上で讀書してをられるこ、堂下で一人の大工が輪を造つてをつた。暫時して大工は道具を放り出してノコノコこ堂に上り桓公に向ひ、

「殿樣の讀んでゐられるのは何の書ですか」

「聖人の書である」

「その聖人は今も生きて居られますか」

「いやもう死なれたよ」

「そんなら殿樣の讀まれるものもやつぱり古人の糟でありますな」

「無禮な事を申すな、わしが讀書するに對して大工の汝がかれこれ申すのは不都合であるぞ、サア汝の議論をいふて見よ、充分の說があればよし、無ければ死刑にあたるぞ」

「かしこまりました、私は私の仕事上から見て申上げます。輪を切るのにも、ゆるくもなく、固くもなく造るのに呼吸がありますそれは手心が一致して出來るので、口では

何こも云ふ事が出來ません。こゝに自然こ物の妙理が存するのであります。けれこも私は之を私の子に傳へてやる事が出來ず。子は私から敎へて貰ふ事が出來ないのであります。私は最早や年を取つて七十になりますが、つらつら思ふのに、古の人も傳へる事の出來ないものを抱いて死なれたらうこ考へます。さすれば御殿さまの讀まれる書も、マア古人の糟粕こ云ふてよいかこ思ひます。」

南畫院の莊子畫冊

上野の一角に南畫院展覽會の第六回が開催されたのは昨年の秋であつた。

餘り華やかでない此の展覽會は入場者も少く他の美術展覽會の賑ふのに比べると氣の毒な位なものだが、靜に展觀するには却つて好都合であつた。

靑年畫家の作にも墨色山水の雅趣を感ずるものもあるが、私は南畫院同人の湯田玉水氏の人格を傳へ聞いてをるので、氏の人格的作品の如何なるものなるかを見に行つたのである。

玉水氏の作品は莊子畫冊の一部として色紙型の小品が八枚程列べてあつた。其他に寒雀と云ふ小品が一枚あつたが之は某宮殿下の御買上げの紙片が小さく着いてゐた。

墨繪の寒雀は如何にも良い、さすがに某宮殿下の御眼識に敬服したわけである。莊子畫冊の方は南畫趣味に乏しい我々には寧ろ畫としてはゾンザイな書き振りに見へるものであるが、然し莊子の哲學味を充分に味ふ點に於て含蓄あるものである。

其の中の一枚、古人糟魄は特に面白いものである。

能率一點張りの現代では無の哲學を說く老莊の敎へはスツカリ忘れられてゐるが、無を說き、愚を說くも決局は有爲の極致で、實に味ふべき事が多い。

本號の表紙が即ち玉水氏の莊子畫冊の一たる古人糟魄の圖である。

一大工の言に對して桓公も果して膝を拍たれた事であらう。

眞の工事技術も自分で實行しなければわからない、わかつた樣な顏をしてゐても眞實の急所はつかめないものである。（岡崎生）